

第2章

名詞・冠詞・代名詞

第1節 名詞

1. 名詞とは

「**名詞**」とは、「ものの名前」や「ものの呼び方」を表す品詞のことです。日本語の「二字熟語」や「四字熟語」なども「名詞」と捉えることができます。

2. 名詞の基本的な働き

「名詞」は基本的に文中の「**主語**」「**動詞の目的語**」「**補語**」「**前置詞の目的語**」のいずれかとして機能します。

(1) 名詞の働き 1：主語となる（述語動詞の「動作を行うもの」「述部の主体」）

例：Taro plays the piano. 「タロウはピアノを演奏する。」

（「Taro」は、述語動詞の動作「play（演奏する）」を行うもの。）

(2) 名詞の働き 2：動詞の目的語となる（述語動詞の「動作が行われるもの」「述部の対象」）

例：Nancy helped Taro. 「ナンシーはタロウを助けた。」

（「Taro」は、述語動詞の動作「help（助ける）」が行われたもの。）

(3) 名詞の働き 3：補語となる（主語や目的語と「イコールの関係」となっている語）

例 1：He is Taro. 「彼はタロウである。」（主格補語）

（「Taro」は、主語「He」とイコールの関係となっている。）

例 2：We call him Taro. 「私達は彼をタロウと呼ぶ。」（目的格補語）

（「Taro」は、目的語「him」とイコールの関係となっている。）

(4) 名詞の働き 4：前置詞の目的語となる（前置詞の後ろに置かれ、形容詞句や副詞句の一部となる）

例：I cooked for Taro. 「私はタロウのために料理した。」

（「Taro」は、前置詞「for」の目的語となり、動詞「cooked」を修飾する「副詞句の一部」となっている。）

5. 可算名詞と不可算名詞

(1) 可算名詞（数えられる名詞）

「1つ、2つ、…」と数えられる名詞のことを「可算名詞」^{かさん}と言います。多くの辞書では「Countable（数えられる）」の意の「C」と表記されています。

「形や輪郭」^{りんかく}がはっきり見えるものなど、「1つ、2つ、…」と数えられるものなら「可算名詞」の扱いとなりますが、「形や輪郭」がなくても、「数えることができる」ならば「可算名詞」となります。つまり「**数**」として認識できるものは全て「可算名詞」となるのです。

可算名詞は数えられますから、2つ以上の場合には「複数形」となります。

例1：book（本）、car（車）、pig（豚）など

→「形や輪郭」が目に見えて可算名詞の扱いとなる名詞

例2：lie（嘘）、order（命令）、effort（努力）など

→ 目に見えないが、可算名詞の扱いとなる名詞

(2) 不可算名詞（数えられない名詞）

「形や輪郭」がはっきり見えず、数えることができない名詞のことを「不可算名詞」^{ふかさん}と言います。多くの辞書では「Uncountable（数えられない）」の意の「U」と表記されています。不可算名詞は「数」ではなく、主に「**量**」を表すので、数を数えたり、複数形にしたりすることはできません。数を数えたい場合や複数形にしたい場合は、その不可算名詞の「単位」を表す可算名詞が使われます。

また、不可算名詞は、文中では、「複数にはならない」ということから、文法的には「単数」として扱われます。

例：water（水）、time（時間）、money（お金）、pork（豚肉）

（数を数えたい場合や複数形にしたい場合は、「two liters of water（2 リットルの水）」「three hours（3 時間）」「four dollars（4 ドル）」など、「単位」を表す可算名詞を使って表現される。）

(3) 使い方や意味によって「可算名詞」と「不可算名詞」の両方になる名詞

英語の世界の名詞は、全て「可算名詞」と「不可算名詞」にきれいに分かれるわけではありません。1つの同じ名詞が、ある時は「可算名詞」となったり、またある時は「不可算名詞」となったりして、使い方や意味によってどちらにもなり得るというケースがあります。

特に「不可算名詞」が「抽象名詞」の場合は、形容詞に修飾されることによって「可算名詞」の扱いになることがあります。

例1：iron「鉄」（不可算名詞）→ iron「アイロン」（可算名詞）

例2：heart「心臓」（可算名詞）→ heart「心」（不可算名詞／可算名詞の両方）

例3: lunch「昼食」(一般的に抽象的な意味なら不可算名詞)

→ a heavy lunch「重い昼食」

(形容詞「heavy」によって修飾されることで、「重い昼食」と「重くない昼食」に分けられたうちの「重い昼食」の方に範囲が狭められ、「1つの範囲」が与えられることで「可算名詞」の扱いとなる。単数の場合には不定冠詞「a」などが伴われる。)

(★「抽象名詞」→ P.46 参照。)

6. 名詞の単数形・複数形

前項「5」で説明したように、英語の世界では、名詞は「**可算名詞(数えられる名詞)**」と「**不可算名詞(数えられない名詞)**」の2つに分類されます。このうち、「可算名詞」については、その名詞の個数が「1つ」の場合には「単数形」という形で表現され、「2つ以上」の場合には「複数形」という形で表現されます。日本語では、例えば「1冊の本」と言っても「2冊の本」と言っても、名詞そのものは「本」のままで変化はありません。しかし英語では、「book(本)」が1冊ならば「one book」という単数形で表現されるのに対し、2冊以上ならば「two books」のように、名詞そのものの形が複数形へと変化して表現されるのです。「単数形」は基本の形なので問題はありますが、「複数形」というものは日本語には存在しない概念ですので、日本人にとってはなかなか馴染みにくいものかもしれません。

さて、可算名詞が「単数形」から「複数形」へと変化する際、その変化の仕方には「**規則変化**」によるものと「**不規則変化**」によるものの2通りがあります。名詞によって変化の仕方が異なりますので、1つ1つ辞書などで確認してみましょう。

(1) 名詞の複数形 1: 規則変化

可算名詞の「単数形」の語尾に「-s」がついて「複数形」となる変化のことを「**名詞の規則変化**」といいます。また「三単現」の条件が揃った場合の「一般動詞の現在形」もこれと同じ変化をします。いずれも次のようなルールがあります。

(a) 単数形の語尾にそのまま「-s」をつける。

例1: dog(犬) → dogs

例2: desk(机) → desks

(b) 語尾が[s], [z], [ʃ], [tʃ], [dʒ]の音になっている場合は「-es」をつける。ただし、語尾が「発音されない『e』」となっている場合は、「-s」だけをつける。

例1: bus [bʌs] (バス) → buses [bʌsɪz]

例2: lens [lɛnz] (レンズ) → lenses [lɛnzɪz]

例3: dish [dɪʃ] (皿; 料理) → dishes [dɪʃɪz]

例4: match [mætʃ] (試合) → matches [mætʃɪz]

例5: bridge [brɪdʒ] (橋) → bridges [brɪdʒɪz]

第2節 冠詞

1. 不定冠詞と定冠詞

「冠詞」には「**不定冠詞** (a または an)」と「**定冠詞** (the)」の2種類があります。いずれも「名詞」を修飾し、「形容詞」として機能します。

(1) 不定冠詞「a」と「an」

不定冠詞の「a」と「an」は、どちらも、「文の発信者」と「文の受信者」との間で「特定されていないもの」を指して、「ある1つの～」と表現したい場合に使われる言葉です。不定冠詞は、後ろに置かれた「**単数形の可算名詞**」を修飾します。

不定冠詞の直後に置かれた言葉が「母音」で始まる場合には、不定冠詞は「an」という形となり、それ以外の場合は「a」という形となります。「母音」とは、日本語の「ア・イ・ウ・エ・オ」に相当する音のことです。

(2) 定冠詞「the」

定冠詞の「the」は、「文の発信者」と「文の受信者」との間で「それとなく特定されているもの」を指して「その～」と表現したい場合に使われる言葉です。定冠詞は、後ろに置かれた「**単数形の可算名詞**」や「**複数形の可算名詞**」や「**不可算名詞**」を修飾します。

また「the」は通常は [ðə] と弱く発音されますが、後ろに続く語が「母音」で始まる場合や、「その～」や「例の～」という意味合いを強調したい場合には [ði] と発音されます。

2. 不定冠詞「a」「an」の用法

(1) 不定冠詞の一般用法

「不定冠詞」の「a」と「an」は、後ろに置かれた「**単数形の可算名詞**」を修飾し、その名詞が「文の発信者」と「文の受信者」との間で「特定されていない」ということを表します。従って、不定冠詞によって修飾された名詞は、「**同じ種類のものがたくさんある中から特にこだわらずに選ばれた1つです**」という意味になったり、「**同じ種類のものがたくさんあって、そのうちのどれとは言わないけれど、とにかくその種類のうちの1つです**」という意味になったりします。不定冠詞は、たいてい「文の受信者（つまり文を受け取る相手）」にとって「**新規の情報となっている名詞**」や「**会話や文脈で初めて出てきた名詞**」に対して使われます。

不定冠詞の「a」と「an」は、敢えて日本語に訳すならば「ある1つの」や「ある1人の」のようになります。ただし、英文の中の全ての不定冠詞を日本語に訳してしまうと不自然な表現になってしまうこともあります。英文の中に不定冠詞が出てきたら、「日本語に訳すべきか訳すべきではないか」をその都度考える必要があります。

第3節 代名詞

1. 代名詞とは

「**代名詞**」とは、「名詞の代わり」に使われる言葉のことです。代名詞には「人称代名詞」「指示代名詞」「再帰代名詞」「不定代名詞」「疑問代名詞」「関係代名詞」など、様々な種類があります。

2. 「人称」と「数」

(1) 人称

英語には「人称」という考え方があります。「人称」には「一人称」「二人称」「三人称」の3つがあります。

<一人称>

「文の発信者」(話し手・書き手)から見て、「自分自身」は「**一人称**」に分類される。「私 (I)」や「私達 (we)」など。日本語では他に「僕」「俺」「わし」「我が輩」など。

<二人称>

「文の発信者」(話し手・書き手)から見て、その文を「受信する相手」(聞き手・読み手)は「**二人称**」に分類される。「あなた (you)」や「あなた達 (you)」など。日本語では他に「君」「お前」「あんた」「そなた」など。

<三人称>

「文の発信者」(話し手・書き手)から見て、「自分」でもなく、「文を受信する相手」でもない「**その他の全て**」のものは「**三人称**」に分類される。「彼 (he)」「彼女 (she)」「それ (it)」「これ (this)」「あれ (that)」の他、普通の名詞も全て三人称となる。必ずしも「人」を表す言葉であるとは限らない。

